

教育問題における心理主義化の動向と理論的検討

—原因帰属の観点から—

○木村 祐子 (お茶の水女子大学大学院)
小針 誠 (同志社女子大学)

1. はじめに

心理主義化⁽¹⁾は、1990年代から注目され、心理学、精神医学、社会学の観点から批判的に検討されてきた。今日では、多くの事例研究が蓄積されており、領域ごとに心理学的知識の特徴や使用法も多様である。たとえば、ビジネスの領域では、「感情管理」や「感情経営」のための「心理学的自助マニュアル」を用いている(森 2000)。また、教育現場では、教員に対して「カウンセリングマインド」を求めたり、心の教育として「心のノート」を使用し、指導している。このように、心理学的知識は、用いられる領域に適したかたちで、柔軟に変容されながら受容されている。

心理主義化現象がさまざまな場面で見られる一方で、現場側から心理学的知識への反発が生じたり、制度が縮小されるなど、心理主義化に対する批判的な評価が提出され始めている。つまり、心理主義化現象はある側面では依然として保たれ、強められながらも、ある側面では弱められているのである。心理主義化は、もはや一色単に捉えられる現象ではなく、事例ごとに丹念に検証していくことでしかそのメカニズムについて把握すること

は難しい。

本報告では、以上のように心理主義化現象そのものが捉えづらくなっていることをふまえたうえで、教育問題における心理主義化の新たな動向について指摘し、心理主義化を構成する要素について理論的に再考した。

2. 先行研究

これまで心理主義化研究は、1990年代からさまざまな問題が「心」を中心とする言葉によって語られていることを指摘し、その背景にある専門家らによる政治性を暴露してきた(伊藤 1996, 小沢 2002)。そして、問題の原因をすべて個人に還元してしまう「個人化」やそれにとともなう「脱政治化」という特徴に警笛を鳴らしてきた(小沢 2002)。

このように、心理主義化批判は、ある程度出尽くした感がある。それにも関わらず、心理主義化のメカニズムや構造については、あまり整理されていない。さらに、近年の心理主義化現象は、新たな特徴や側面を持っており、捉えなおす必要がある。そこで、本報告では心理主義化現象の新たな動向について検証した。

3. 心理主義化現象の新たな特徴

①「傷つきやすい個人」の増加

教育問題が起こったときに頻繁に用いられた「心の闇」、「心の傷」、「心の病い」などの言説は、主に問題を起こした者(加害者)の理解困難な行為の説明として付

(1) 森の定義によれば、心理主義化とは「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向(森 2000,9頁)」を意味する。

与される傾向にあった。

しかしながら、最近の傾向では「心の傷」を抱えるとみなされるのは、「加害者」だけではなく「被害者」、「周囲に居合わせた者」、「伝え聞いた者」にまで適応され、拡大されている。ブルナー (2005) は、トラウマの事例からレットルが「当事者 (個人)」だけでなく「居合わせた者 (集団)」にまで付与されていることを指摘し、集団全体が傷つきやすい対象となっていると述べている。

このような「傷つきやすい個人」の増加は、あらゆる場面で生じ、問題や事件と関わった多くの対象者に「心」のレットルを付与することで、問題の所在を個人に還元し、「脱政治化」を促進させると考えられる。被害者に「心」のレットルを付与することは、被害者意識や政治化を高める可能性もあるが、結局は「被害者」という個人を「癒す (治療)」対象と捉えることで個人の問題へと収束させてしまう。つまり、あらゆる方向から「個人化」と「脱政治化」のメカニズムが働くことになる。

②医療化^②現象との関連性

次に、心理主義化と「医療化 (medicalization)」の関係性について検討した。近年、アメリカ精神医学会が作成した『精神疾患の診断・統計マニュアル (DSM)』が日本でも急速に浸透し、多くの新しい医療的な診断名が普及しつつある。このような背景により、心の問題は、『DSM』にもとづいて医療的に診断名を与えられつつある。たとえば、心

^② 「非医療的問題が通常は病気あるいは障害という観点から医療問題として定義され処理されるようになる過程 (Conrad & Schneider 訳書 2003, 1頁)」。

の病気としての「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」は、その典型的な事例である。また、『DSM』に掲載されている障害の多くは、心理学的な要素を含み持つ。このことから、「心理主義化」と「医療化」は、事例によって、確実にリンクしていた。

ただし、「心」の言説でみられるような「心の病い」については、医療的な診断名を用いているわけではなく、医療化現象として把握しづらい。よって、「隠喩」的な表現として解釈する必要があった。

4. おわりに

本発表は、心理主義化現象の新たな動向として「傷つきやすい個人」の増加について触れ、「医療化」との関係性について検討した。特に、医療化との関係性は、今後心理主義化を捉えるうえで、重要な構成要素として位置づけられる。

<参考文献>

- Conrad, Peter & Schneider, Joseph. W. 1992, *Deviance and Medicalization : From Badness To Sickness*, Temple University Press, (=進藤雄三, 杉田聡, 近藤正英訳 2003, 『逸脱と医療化—悪から病いへ—』ミネルヴァ書房).
- 伊藤茂樹 1996, 『「心の問題」としてのいじめ問題』『教育社会学研究』第59集, 21-37頁.
- J.ブルナー 2005, 「傷つきやすい個人の歴史—トラウマ性障害をめぐる言説における医療、法律、政治—」, 『思想』第4号.
- 森真一 2000, 『自己コントロールの檻』講談社.
- 小沢牧子 2002, 『「心の専門家」はいらない』洋泉社.